

第5章 今西伊之吉と大和の歴史地理

—喜田貞吉との関わりを中心に—

I. はじめに

今西伊之吉（第9図）は明治8（1875）年に奈良県に生まれ、地元の小学校教師を勤めながら郷土奈良（大和）の歴史地理研究などを進めた人物である。大和における宮都跡や条里遺構などの歴史的遺跡、さらには大名領地などの研究に取り組み、『高市郡史蹟略考』などの著作を残した（第5表）。大正11（1922）年に47歳の壮年で没している。

この今西が大和の歴史地理研究を進める上で重要な役割を果たしたのが、歴史地理学者の喜田貞吉である。喜田はわが国における歴史地理学の開拓者の一人であり、日本歴史地理研究会（のち日本歴史地理学会と改称）を設立した人物¹⁾であったが、研究の推進にあたり、地方研究者との交流を重視した。これに呼応して多くの地方研究者が研究会との、あるいは喜田個人とのつながりを作った。本章の研究対象である今西も、まさにその一人であった。

このように明治・大正期という日本の歴史地理学の草創期において、中央と地方の研究者との相互交流が行われていた点は注目に値する。このような交流は、喜田と今西のみならず、例えば日本歴史地理研究会メンバーの堀田璋左右らと栃木県の田代善吉²⁾、同じくメンバーの藤田 明と静岡県（のち群馬県）の八木昌平³⁾、研究会の賛成員である久米邦武と滋賀県の中川泉三⁴⁾などの間にも見られ、盛んに知識や情報の交換が行われていた。まさに大正初期に民俗学者の柳田国男が雑誌『郷土研究』を通じて行ったような地方との相互交流⁵⁾が、すでに喜田や研究会メンバーらによって試みられていたこととなる。

明治期以降の歴史地理学の発達史を考える上で、こうした中央と地方との関係に対する考察は重要である。というのも、中央の研究者の知見が郷土研究者を刺激し、明治末以降の郷土誌・地方誌編纂ブームの勃興に大きな役割を果たしたとされるからである⁶⁾。しかし従来、このような研究はほとんど試みられたことがなく、その交流の実態はあまり明らかになっていないのが現状である。数少ない例として、地理学の立場からではないが、花森重行が歴史学(近代史学史)の立場



第9図 今西伊之吉の肖像

出典：乾 健治『今西伊之吉伝』

桜井史談会、1971年の口絵より転載

第5表 今西伊之吉の著作目録

著者(編者)名	タイトル	掲載誌・発行元	掲載・発行年	備考
今西伊之吉	越智氏の墳墓	歴史地理2-8	明治33(1900)	
高市郡斯民会	高市郡史蹟略考	奈良県高市郡斯民会	大正1(1912)	執筆は今西ほか1名
奈良県高市郡役所	奈良県高市郡志料	奈良県高市郡役所	4(1915)	執筆は今西ほか6名
奈良県高市郡教育会	三山谷先生遺稿	奈良県高市郡教育会	6(1917)	編纂は今西
今西伊之吉	初瀬の頭仲間について一祭礼座の研究(上)	民族と歴史3-4	9(1920)	
今西伊之吉	初瀬の頭仲間について一祭礼座の研究(下)	民族と歴史3-5	9(1920)	
香畝生	夙の者雪冤運動 岡本黄中の「振濯録」―「土部源流考」に就て―	民族と歴史4-2	9(1920)	香畝生は今西の筆名

注) タイトルがゴシック体のものは単行本

から先に挙げた久米と中川との関係を日本歴史地理研究会の活動を通じて論じている⁷⁾。花森は同研究会における中央と地方との交流を、柳田民俗学におけるそれとの関連で捉えており、非常に興味深い視点を提示しているが、交流の中身については必ずしも詳細には検討しておらず、なおも課題は少なくない。

そこで本章では、明治期以降の歴史地理学界における中央と地方の交流の実態を明らかにする観点から、大和の歴史地理研究者である今西伊之吉を取り上げ、その生涯や学問の内容などについて喜田との関わりを中心に考察を進めていくこととする。大和を終生のフィールドとした喜田にとって、今西は最も関係が深かった郷土研究者の一人であった。その意味からも、本章は中央と地方の交流を明らかにする上で興味深い事実を示すと考えられる。幸い今西には、大和郷土史家の乾によって著された『今西伊之吉伝』という伝記があることから、これに依拠しつつ、今西の生涯と学問を喜田との関連において再構成していく⁸⁾。また現在、奈良県立図書情報館には、今西が筆写した膨大な大和関連資料が「今西文庫」として残っており⁹⁾、この資料についてもできる限り参照していきたい。

なお、今西の業績には歴史地理に含まれない郷土史的な業績も見られるが¹⁰⁾、本章ではあくまで歴史地理研究を中心とし、郷土史については検討の対象外とする。

II. 生い立ちと喜田との出会い

(1) 生い立ち

今西伊之吉は明治8年10月に、奈良県十市郡大福村(現、桜井市)に生まれた¹¹⁾(第6表)。大福小学および桜井高等小学校¹²⁾に学んだが、母の影響で幼少の頃から歴史に興味を持ち、12歳の頃に大福村に近い安倍村の郷土誌「安倍村考」を執筆したという。安倍村は大福村に近く、日本三文殊の一つである安倍文殊院が立地するなど歴史豊かな土地であった。今日、その処女作とも言うべき「安倍村考」は残存していないが、後の歴史地理研究の萌芽が見られる習作であったと考えられる。この点、同じく明治・大正期に活躍した歴史地理学者・吉田東伍が17歳の時に執筆したとされる郷土誌「安田志料」を想起させる¹³⁾。明治24(1891)年に桜井高等小学校を卒業し、翌25年9月、奈良県尋常師範学

第6表 今西伊之吉年譜(附喜田貞吉年譜)

時期	今西年譜	喜田年譜
明治 4(1871)		5月, 徳島県那賀郡立江村で誕生
8(1875)	10月, 奈良県十市郡大福村で誕生	
20(1887)	「安倍村考」執筆	
25(1892)	9月, 奈良県尋常師範学校入学 11月, 晩成尋常小学校勤務	
26(1893)		9月, 帝国大学文科大学(国史科)入学
29(1896)		7月, 帝国大学を卒業して大学院入学
32(1899)	日本歴史地理研究会に入会	4月, 日本歴史地理研究会創設 10月, 研究会の機関誌『歴史地理』発行
33(1900)	11月, 『歴史地理』に「越智氏の墳墓」発表	1月, 東京専門学校講師就任
34(1901)	2月, 東京専門学校に通って喜田に学ぶ	
	5月, 椿井尋常小学校勤務	5月, 文部省に勤務し, 教科書検定に従事
39(1906)	この頃, 喜田の大和条里調査に協力 12月, 再び晩成尋常高等小学校勤務	2月, 平城京・大和条里をめぐる論争開始
41(1908)		2月, 京都帝国大学文科大学講師就任
42(1909)	9月, 高市郡史蹟調査委員に就任 この頃, 喜田の飛鳥宮都調査に協力	
43(1910)		12月, 南北朝正閏問題勃発
44(1911)	3月, 南北朝正閏問題下の喜田に書簡	
45(1912)		7月, 『歴史地理』に「飛鳥の京」発表開始
大正 1(1912)	10月, 『高市郡史蹟略考』刊行	
2(1913)	8月, 奈良歴史地理大講演会に参加	8月, 奈良歴史地理大講演会で講演
4(1915)	11月, 今西ら編纂の『奈良県高市郡志料』刊行	
6(1917)	1月, 『三山谷先生遺稿』刊行	
7(1918)	3月, 喜田の大名領地沿革調査の助手に就任	4月, 大名領地沿革調査開始
8(1919)		1月, 個人雑誌『民族と歴史』発行
9(1920)	2月以降, 『民族と歴史』に郷土史研究を発表	
10(1921)	3月, 奈良県立図書館に勤務 大和郷土研究会の立ち上げを画策	
11(1922)	7月, 奈良で没(47歳)	9月, 今西の葬儀に参列
昭和 14(1939)		7月, 東京で没(69歳)

注) 喜田の年譜は, 主として今西に関連する項目を選定して記載した。

出典: 乾 健治『今西伊之吉伝』桜井史談会, 1971, 喜田貞吉『喜田貞吉著作集14 六十年の回顧・日誌』平凡社, 1982など。

校(現, 奈良教育大学)に入学した¹⁴⁾。同校には当時, のちに「大和の水木か, 水木の大和か」と称えられ, 奈良女子高等師範学校教授にまでなった郷土史家の水木要太郎が歴史教師として勤務していた¹⁵⁾。今西が水木に日本史を教わったことは間違いないが, 大和郷土研究に関して, 今西がどの程度水木から影響を受けたかは不明である。いずれにせよ今西は病気のため, わずか数か月後には尋常師範学校を退学しているようである。

尋常師範学校を退学したものの, 教員への思い止みがたく, 明治25年11月から現在の桜井市にある晩成尋常小学校の準訓導として教鞭をとっている¹⁶⁾。同28年に奈良尋常師範学校の講習会を受け, 29年には正規の教員(訓導)となった。一方, 教員としての職務の傍ら郷土史や歴史地理研究を進めており, 奈良県立図書館の「今西文庫」を見ると, 明治30年に「大和雑記」「大和名所歌」などの史料を筆写していることが分かる¹⁷⁾。

(2) 喜田との出会い

このように郷土大和の歴史地理研究に関心のあった今西にとって、明治 32 (1899) 年 5 月に設立された日本歴史地理研究会には強く興味をひかれたことであろう。この研究会は、当時東京帝国大学大学院で歴史地理を研究していた喜田が中心となって設立されたもので、10 月からは機関誌『歴史地理』が発行されている¹⁸⁾。目指すところは全国各地の史跡などに関する歴史地理研究の推進にあったが¹⁹⁾、すでに述べたように、研究に際して地方の知識人の参画を広く求めた点に特徴があった。同研究会の設立趣意書には「其地に生れ、其地理に熟すること最も深き、各地方篤学の士の補助を得ざるべからず」と協力を呼びかけている²⁰⁾。また『歴史地理』創刊号に掲載された喜田の「小学校教員諸氏に歴史地理の研究をすゝむ」でも、「教員諸氏は(略)地方にありて其地の志を修む、攻究に於て最も便を有す、余輩は諸氏とともに之が攻究に従事せんことを喜ぶものなり」²¹⁾と述べられており、地方との連携を重視する考え方がにじみ出ている。同研究会は『歴史地理』への地方会員からの投稿や研究調査上の質問を受け付けるとともに、各地で夏期講演会を実施し、歴史地理上の知見や研究方法などの普及に努めた²²⁾。特に夏期講演会には毎回小学校教員などの郷土研究者が多数来場しており、郷土誌(史)研究の活性化に大きな役割を果たしていたとされる²³⁾。

今西は、設立当初から会員としてこの日本歴史地理研究会に参加している²⁴⁾。毎月送られてくる『歴史地理』に掲載された喜田ら主要メンバーの諸論考に、大いに知的刺激を受けたに違いない。なかでも毎号精力的に論考を発表する喜田には、特に関心をひかれたと思われる。後で述べるように、今西がこの後上京して喜田に師事するようになるのも、日本歴史地理研究会加入が発端ではないかと考えられるからである。

今西はこの『歴史地理』に、「越智氏の墳墓」と題する短編を投稿している。この短編で今西は、南北朝時代に南朝方に属した豪族・越智氏の墓について「実地踏査の結果を公にして、以て斯学研究の参考に供せん」と述べ、その墓が菩提寺である奈良県高市郡の光雲寺にあるとしている。光雲寺に残る墳墓 10 基について、碑銘は磨滅して読めないが、寺に伝わる古位牌と過去帳に照らし合わせて越智氏の墓であると推定している。この論考は短いが、今西の研究スタイルがうかがえる一編である²⁵⁾。

さて、明治 33 年(1900) 12 月、今西は晩成尋常高等小学校を辞して東京に向かった。今西が上京したのは、当時東京専門学校(現、早稲田大学)で講師を務めていた喜田に学ぶためであったと思われる。喜田は明治 33 年 1 月より文学部史学及英文学科の講師²⁶⁾として国史地理を担当しており²⁷⁾、おそらく今西は、上京前後に日本歴史地理研究会の会員名簿などを見て喜田と連絡をとり、東京専門学校で学びたい旨を伝えたのではないだろうか。乾は『今西伊之吉伝』で「早稲田の夜学部に通った」²⁸⁾と述べているが、実際に正規に入学したのかどうかは資料がなく不明である。今西が喜田のいる文学部で学ぶためには、まずは予備門である高等予科に入学する必要がある²⁹⁾。今西は明治 34 年の 2 月に試験を受けて高等予科に入学³⁰⁾し、喜田の好意で文学部の講義を私的に受講していたとも考えられる。

当時同校で喜田が行った講義の内容については、幸いにも今日、講義記録である「日本地理講義」が現存しており、そこから今西が聴いたおおよその内容を知ることができる³¹⁾。この講義は「日本地理」と題してはいるが、実質的には日本の歴史地誌であり、畿内をはじめとする各地の史蹟や歴史的沿革などに関する概説となっている。概説だけに大和の歴史地誌も至って簡略な内容であり、のちに喜田の研究テーマとなった平城京についても「一日聖武帝カ恭仁京ニ遷都シタルタメニ衰へ再ヒ桓武帝カ長岡京ニ遷都シタルタメニ廢シテ全ク田園トナリ」と触れているだけである。乾は「早大で喜田博士に大和の条里を教わった」³²⁾と述べているが、講義録を見る限り、大和平野の条里については言及すらしておらず、今西がこの講義で大和の都城や条里の知識を深めたとは考えにくい。ただし喜田から授業外で特別に教示を得ていた可能性もあり、紙上でしか接しえなかった歴史地理学者の警咳に触れたことで、学問への思いはさらに高まったことであろう。

しかし翌34年3月には、早くも東京を辞して奈良に帰郷している。またも病気がその理由であり、帰郷後の5月には奈良市内の椿井尋常小学校に代用教員（のちに訓導）として職を得た³³⁾。結果的に在京期間はわずか3ヶ月程度であったが、短期間とはいえ、今西の研究人生にとってこの上京は大きな意義を有するものであった。喜田の国史地理を受講できたこと、そして喜田との交流が事実上始まったことで、今西の研究人生は大きく変わる事となる。この点について次節以降において具体的に検討していきたい。

Ⅲ. 喜田の平城京・条里研究との関わり

明治39(1906)年2月、喜田と建築史家関野 貞との間で著名な平城京・条里論争が始まった³⁴⁾。この論争は関野が平城京と大和平野の条里などに関する研究を發表し、喜田がその内容に異を唱えたことに端を発するものであった。主な論点は平城京の北辺坊の範囲や周辺条里の復原方法などであり、加えて平城京内における大路小路の幅員や尺度、諸寺の立地などについても論争が交わされている³⁵⁾。

喜田が関野に反論すべく材料を集めるにあたり、自身で現地調査するのみならず³⁶⁾、今西に大和条里にかかわる現地調査や地籍図収集を依頼していたようである。喜田自身、次のように回顧している。

今西君は（略）深く同県下（奈良県—筆者注）の史実や史蹟に通曉せられ、かつて自分が大和平野の条里を調査したさいにも、自分のために奔走して材料を集めてくれたことであった（以下略）³⁷⁾

また『今西伊之吉伝』の著者である乾も、

喜田博士の大和の条里の研究の際には今西氏は各町村の坪割の調査をされていた。大和の条里は今西氏の足にまかせて出来たものである（略）大和の条

里制の地図作成は今西氏の手になったもので喜田博士は地図は書かなかった。
(以下略)³⁸⁾

と述べているが、「地図は書かなかった」かどうかはともかくとして³⁹⁾、今西が史料収集を担うなど大きな役割を果たしていたことに間違いはなさそうである。

今日、今西がどのようなデータを収集して喜田に提供していたのか、残念ながら詳細は不明であるが、この点に関して示唆的な記録がある。それは今西の畏友で奈良県師範学校教諭の高田十郎による「故今西伊之吉君写本目録」(第7表)である⁴⁰⁾。高田は今西の没後、128種に上る膨大な大和関係資料(写本など)を整理しているが、その目録の中に「大和条里の研究 二冊(稿本)」や「奈良小字全図一折 竪五尺余、幅七尺」がある。これらの資料は「今西文庫」中には現存しないが⁴¹⁾、いずれも喜田の求めに応じて独自に整理した研究や地図ではないかと思われる。

喜田の学説は、そのまま今西の学説でもあった。そのような関係を立証する興味深い今西作成の資料が、奈良県立図書情報館に残されている。資料タイトルは「大和平野條里図」(第10図)であり、作成年次は不明であるが、明治45年(1912)発行の2万分の1地形図をベースに方格線を記入していることから、明治末から大正初期の制作と思われる⁴²⁾。ここに復原された平城京条坊や大和条里を確認すると、すべて喜田の説と同一であることがわかる。例えば京の北辺に張り出す北辺坊は喜田説のとおり右京二、三、四坊のみとし、京北条里の起点を北辺坊の北端線としている。また京南路西条里について、南京極の南方3町を一条とし次の6町を二条としている点は喜田の説そのものである。この地図は制作年代を考えると、喜田に提供するために作成したというよりは今西が自身の研究のために作成したものであろう。この図の内容がもともと今西の説なのか、喜田の影響を受けてこのような条坊・条里の復原をしたのかは不明であるが、いずれにせよ平城京・大和条里研究において、喜田と今西が調査結果や知見を交換していたことは間違いない。例えば時期は下るが、大正2(1913)年に奈良県教育会主催、日本歴史地理学会協力で開催された「奈良歴史地理大講演会」では、喜田も「平城京の研究」と題して講演を行っており、今西もこの講演会に聴衆として参加している。こうした機会を通じて、今西は喜田の学説に理解を深めていったことと思われる⁴³⁾。

以上、喜田の歴史地理学上の重要な研究である平城京・条里研究に関して、今西との関わりについて論述した。ところでこの論争後の明治43(1910)年12月、喜田に重大な事件が降りかかる。小学校の国定教科書に端を発する、いわゆる南北朝正閏問題の勃発である。喜田は明治34(1901)年から文部省に勤務していたが、同36年から文部編修として国定教科書の編集に関わっていた⁴⁴⁾。このため喜田は、まさしくこの問題の当事者として各方面からの非難の矢面に立たされることとなった。この頃、今西が喜田に宛てた書簡が残っている。日付は明治44年3月4日で、差出人は「奈良県高市郡八木町札之辻東入 今西伊之吉」とある。こ

第7表 高田十郎作成「故今西伊之吉君写本目録」

1 大乘院寺社雑事記抜粹 22冊	32 岡寺境内絵図 1枚	84 四条村岡寺二十石田地鏡 1冊
2 同 補遺 1冊	33 賤民資料 1冊	85 高市郡志稿 1冊
3 大乘院記録目録 大乘院文書 合1冊	34 高ねのあと 1冊	86 高市郡白檀今井鴨公各町村史志 1冊
4 応仁史料 3冊	35 大和寺院史料 1冊	87 和州風土記 付 越智家譜伝 1冊
5 文明史料 1冊	36 大和志料(奈良附近寺院) 1冊	88 越智古老伝 1冊
6 多聞院日記略 2冊	37 同(高市郡ノ部) 1冊	89 大和国越智家系図 1冊
7 同 日記抄 1冊	38 大和珍宝記 1冊	90 越智氏年表 1冊
8 多聞院日記 6冊	39 考古 2冊	91 高宮系図 附 越系図 1冊
9 同 目録 1冊	40 香畝記 1冊	92 和州十市城主氏姓伝 1冊
10 興福寺蓮城院記録 法隆寺網封倉頼祐之日記 多聞院日記(抄録) 合1冊	41 雑輯 3冊	93 和州筒井流系図 窪氏系図 河村氏系譜 赤埴家系図 岡本家系図並譜伝 合1冊
11 宗栄日記抜書 1冊	42 集古十種(印章ノ部抜粹) 1冊	94 高市郡志編纂資料 3冊
12 大和戦国史料 1冊	43 麦秀録 1冊	95 藤はら 1冊
13 尋尊僧正記 東大寺雑集録 合1冊	44 東都雑録 1冊	96 高取藩ニ関スル資料 1冊
14 満濟准后日記 1冊	45 史苑拾遺 1冊	97 孝子山口庄右衛門行状聞書 平三郎孝状 合1冊
15 興福寺維摩日記 1冊	46 漫遊録 6冊	98 韜庵遺稿二卷 日新樓文稿(柳田弼著) 合1冊
16 諸家史料 1冊	47 大和錦 1冊	99 三山谷先生伝記史料 1冊
17 東大寺文書目次 1冊	48 青山入夢録 1冊	100 谷三山先生遺文録 1冊
18 東大寺文書 2冊	49 青柳の糸草 1冊	101 淡庵管見(谷三山著) 有松居札記 龍聽漫筆 合1冊
19 同 1冊(第二回採訪)	50 仏師木寄法 1冊	102 愛静館筆語(早野勘平著) 1冊
20 東大寺古文書 正倉院文書 薬師院古文書 西大寺文書 菩提山正曆寺原記 真弓山長弓 寺記 小杉氏所蔵文書 多田来迎寺旧記 当麻寺文書 弘福寺古文書 栄山寺文書(ソノ他) 合1冊	51 今昔物語選 1冊	103 三山門人森竹汀文集 1冊
21 大仏燈油料田記録 1冊	52 類聚三代格、符宣抄々録 1冊	104 三山先生塾門人訳文 孝義伝 1冊
22 東大寺禪記(公人要録) 1冊	53 大日本史料第六編記録 1冊	105 門人書簡集 1冊
23 公人要録附録(正倉院宝物図) 1冊 彩色図 16枚	54 南山小譜抜録 1冊	106 谷三山文抄 2冊
24 春日神社文書 9冊	55 史料漫録 2冊	107 森田節齋遺文 2冊
25 春日社文書 東大寺八幡宮文書 談山文書 染田天神古文書 多社文書 神戸文書 合1冊	56 南行雑録 5冊	108 森田節齋書牘集 1冊
26 南都薬師院旧記 興福寺年代記略 当社御座御進登御入洛御帰座代々 日記 大乘院御領御段銭日記 神殿庄田数(康正二年算田帳) 正和二年豊浦御庄検注帳 春日若宮御社領大和国葛上郡伴田 西東御庄(応永二五) 春日社御神供米吐田庄納帳 (天正一一) 注進楊本御荘畠数並斗代事 (建長四) 大乘院領出雲荘貞和二年年貢目録 注進井兵庫荘御供米事(康正二) 東大寺領大和国散在田地並抑留 交名事(文和二) 合1冊	57 東遊日記 2冊	109 同 文集目次 1冊
27 大和戦国史料	58 野山のなげき 1冊	110 三山節齋雜俎 2冊
28 櫛のくち葉	59 大和史談 1冊	111 猪飼敬所書牘集 1冊
29 二見文書 1冊	60 大和国土性要録 1冊	112 敬所手束 1冊
30 岡寺資料1冊	61 大和名所記 3冊	113 袁多満幾(敬所著) 1冊
31 同 1冊	62 大和国高附帳 1冊	114 諸陵雑事注文 興福寺現住僧帳 合1冊
	63 大和国大名系図	115 寛文調及元禄調 各郡村数及石高 一覽表 昔古累世早見御武鑑(応仁武鑑 抄録) 合1冊
	64 調査目録 1冊	116 旧高並所轄沿革取調帳 3冊
	65 屑籠草紙 1冊	117 日韓交通史料 1冊
	66 諸雜誌新聞記録簿 1冊	118 大和州高市郡図 1折
	67 史論雑集 1冊	119 奈良小字全図 1折
	68 大和条里の研究 2冊	120 笠置山之城元弘戦全図 併四方 手配堅固図1折
	69 西大寺三宝料田園目録 (郡別坪付字名調査表) 1冊	121 熊凝精舎班田図 1折
	70 陵墓志 1冊	122 大和平野各部地区 118枚
	71 備忘隨筆 諸国風俗御尋ニ付申上候書 (大和及諸方ノ年中行事) 合1冊	123 地区及筆記物類 1袋
	72 園大曆室町記書記通證古事記伝 抜録 1冊	124 筆記物類 2袋
	73 刀工系図 1冊	125 筆記物 雑集 1冊
	74 陽春廬雜考抄 1冊	126 雑録 1冊
	75 蔭涼軒日録抄 2冊	127 四六型ノート 1冊
	76 同上 1冊	128 ポケット型小手帖 9冊
	77 祇園執行日記 1冊	
	78 史料雑輯 1冊	
	79 法隆寺伽藍縁起並流記資財帳 春日社領田文 春日山木枯朽(天保七) 合1冊	
	80 招提千歳伝記 1冊	
	81 南朝遺史 1冊	
	82 和州高市郡御檢地帳 1冊	
	83 高市郡土橋村文禄四年檢地帳 研究 1冊	

注1) 高田作成の目録には、資料名や冊数のほかに資料の形状やサイズ、高田による簡単な解説が付されているが、ここでは割愛した。

2) 資料番号がゴシック体のものは奈良県立図書館所蔵の「今西文庫」に現存。

出典：高田十郎「故今西伊之吉君写本目録」なら17, 1923, 2-5頁。

で今西は南北朝正閏問題について次のように述べている。

陳々此度教科書南北朝正閏問題一件ニ
は先生に於せられては不一方御迷憾に
罹らせられ候趣日々之新聞にて拝承実
に実に御氣毒遺憾の事ニ御座候（略）社
会一般之歴史的智識之浅薄なるにハ驚
入申候（以下略）⁴⁵⁾

喜田が非難を受けていることに対して「御氣毒遺憾の事」とし、世の中の「歴史的智識」が浅いことに批判の眼を向けている。今西が確かな史眼を持っていたことが窺えると同時に、喜田に対する今西の感情を知る上で興味深い資料である。



第10図 「大和平野條里図」

（平城京と京北条里の部分）

出典：奈良県立図書館所蔵資料を筆写撮影

IV. 『高市郡史蹟略考』の刊行と飛鳥研究

大正元（1912）年10月、高市郡斯民会から『高市郡史蹟略考』⁴⁶⁾が刊行された。これは明治末から大正にかけて各地におこった、郷土誌・地方誌編纂事業ブーム⁴⁷⁾に棹差すものでもあった。編者名は高市郡斯民会となっているが、乾によれば実質的に今西の執筆したものであったという⁴⁸⁾。同書の緒言に「本稿調査を委託したる晚成小学校訓導今西伊之吉君，真菅小学校長山田梅吉君，并に校閲を経たる奈良女子高等師範学校教授水木要太郎先生（以下略）」とあるが、今西の名が筆頭にあげられていること、もう一人の執筆者（調査受託者）が校長の現職にあった点を考慮すると、調査や編集などの実務面は今西が担当していた可能性が高い⁴⁹⁾。

当時の高市郡は歴史の宝庫飛鳥をはじめ、現在の橿原市や高取町などを含み、古代史上重要な場所であった。今西は明治42（1909）年9月に高市郡史蹟調査会の調査委員を嘱託されており、「周く実地を踏査し、或は古老に就いて伝説を求め」て調査を行い⁵⁰⁾、知見を蓄積していた。『高市郡史蹟略考』ではこうした知見などを踏まえ、陵墓（附古墳）に始まり、宮址、城址、旧蹟、神社仏閣、国宝及び特別保護建造物を幅広く取り上げている。乾はこの書について「引用書を（略）明記して筆者勝手な独断的表現法を用いていない」とし、「従来の諸説を根本的に改めた新研究」と高く評価した。また地元の考古学者であった島本も、「高市郡内の研究はその白眉」と評価している⁵¹⁾。

この書は、喜田との関係において重要な意味を有している。というのも従来、この書が喜田の飛鳥研究の基礎となっていると指摘されているからである。特に

飛鳥における宮都の研究については、乾が「高市郡飛鳥地方の帝都の研究は今西氏に負うところが多い」とし、さらに「喜田博士の一期の飛鳥京の新説は今西氏の説によるものである」とも述べて喜田に与えた影響を指摘している⁵²⁾。この点について詳細に検討するため、以下において二人の飛鳥宮都研究に関する言説について考察を試みたい。

喜田が飛鳥の宮都に関して、初めてまとまった形で論及したのは明治40年(1907)の「上代帝都の所在に就て」⁵³⁾である。この論考は、神武天皇の「畝傍橿原宮」から飛鳥の諸宮、平城京、平安京などを経て中世の南朝行在所の比定地までを概観したものである。その中で、天武・持統両天皇が営んだ飛鳥浄御原宮に関する学説の変化が興味深い事実を示している。喜田はその所在地について「大和国高市郡高市村上居」としている⁵⁴⁾(第8表)。この説は「浄御」と「上居」(じょうご)の音が同一であることなどを根拠とする当時の有力な説であった。

一方今西は、高市郡史蹟調査会の調査委員に委嘱された明治42年ごろから、飛鳥の宮都に関する調査に本格的に取り組んでいる⁵⁵⁾。「今西文庫」には『高市郡志 編纂資料 明治43年』という資料があり、そこに綴じこまれた「高市郡志」の中に、飛鳥の諸宮に関する記載がある⁵⁶⁾。ここでも飛鳥浄御原宮について見てみると、その比定地をやはり「上居」としている。今西も喜田と同様、従来の説に従っているのである。

明治45年になると、喜田は飛鳥宮都研究に一石を投じることとなる論考「飛鳥の京」を『歴史地理』に発表する⁵⁷⁾。この論考は、地元の郷土史家から「其の説く所旧来の諸説と頗る異なるものあり」⁵⁸⁾として注目された研究であるが、飛鳥浄御原宮についても新しい知見を披露している。喜田はこの論考で、飛鳥浄御原宮について「旧説多く島庄の東南なる大字上居を以て之に当つ」とした上で、次のように述べている。

浄見原朝時代には(略)都城の壯麗見るべきものありしなるべく(略)所謂八省百官はほゞ宮城内に具備したりしものゝ如く(略)所謂十二門亦悉く備わりしなるべく(略)斯くの如き地、如何ぞこれを上居の如き山間狹隘の地に求むべけんや(略)浄見原は真神原と同一か、若くは其の一部の名なるべく(以下略)⁵⁹⁾

ここで喜田は、都城的色彩を帯びていたと推測される飛鳥浄御原宮(浄見原宮)が、上居のような「山間狹隘の地」に立地したとは思えず、その所在は大字飛鳥付近の真神原であると結論している。すなわち明治40年当時の自説を否定しているのである。興味深いことに今西も、その数ヵ月後に刊行された『高市郡史蹟略考』において、それまでの「上居」説を否定して喜田の言説に沿った説を展開し

第8表 飛鳥浄御原宮に関する喜田と今西の説

提唱者	宮の比定地	時期	資料名
喜田	大和高市郡高市村上居	明治40(1907)年7月	「上代帝都の所在に就て」
今西	大和高市郡飛鳥村上居	明治43(1910)年1月	『高市郡志編纂資料 明治43年』
喜田	飛鳥村大字飛鳥付近(真神原)	明治45(1912)年7月	「飛鳥の京」
今西	飛鳥村大字飛鳥(真神原)	大正元(1912)年10月	『高市郡史蹟略考』

注) 今西の『高市郡志編纂資料 明治43年』における「飛鳥村」は「高市村」の誤り

ている。

旧説高市村大字上居を以てこの宮址に擬するものあれども、上居の地は狭小にして、逆も四方十二門の大宮殿を經營するの餘地なく、浄御原は即ち真神原の異名なるべし(以下略)⁶⁰⁾

この今西の文章は上に掲げた喜田の考えと酷似しており、明らかに喜田との情報交換の結果であろう。

ここでは一例として飛鳥浄御原宮を取り上げたが、学説の発表時期から考えれば、喜田が先に新説を提唱し、今西がそれに従ったと見るのが自然であろう。したがって乾のように、今西の『高市郡史蹟略考』が喜田の宮都研究の基礎となったと見るのはやや無理があると思われる。しかし確かなことは、喜田が研究の過程において、今西に現地情報の収集を依頼していた点である。先ほど見た「今西文庫」のなかの『高市郡志編纂資料 明治43年』を読み進めていくと、「喜田用紙」と印字された原稿用紙が混じっていることに気づく(第11図)。この「喜田用紙」が喜田特製の用紙であるとすれば⁶¹⁾、喜田は今西に対して原稿用紙を提供し、飛鳥の諸宮を始めとする様々な史蹟の調査記録を依頼していた可能性が高い。今西が飛鳥浄御原宮についてどのような調査結果を書き送ったのかは不明であるが、「上居」説否定につながる情報や知見が盛り込まれていたとも推測される。

以上、飛鳥の宮都研究を事例に喜田と今西との関係について検討した。今西の『高市郡史蹟略考』が喜田に影響を



第11図 「高市郡志編纂資料 明治43年」原稿の一部
(原稿の中央下に「喜田用紙」と記載)

出典:奈良県立図書館情報館提供

与えたとする乾の主張にはやや無理があるが、喜田に対する今西の貢献はある程度事実と見てよいであろう。今西が喜田に材料を提供し、それを基礎に喜田が分析を行い、その分析結果を踏まえて今西が飛鳥研究を深めるという関係が、二人の間で成り立っていたのではないだろうか。ただし今西がすべての飛鳥研究において喜田の説を無批判に受け入れていたわけではなく、喜田と異なる今西独自のものがあることは注意すべきである。宮都研究に関して見ても、例えば允恭天皇の遠飛鳥宮の比定地については、喜田が「飛鳥村大字飛鳥字鳥形山」としているのに対し、今西は「飛鳥村大字飛鳥字ミカド」と推定している⁶²⁾。これは今西自身の現地調査によるものであろう。また宮都以外の研究、例えば墳墓や城址などについては喜田の知見も限られていたため⁶³⁾、それらは今西独自の調査研究に基づくものが多いと思われる。その意味において、今西は単なる資料収集家や情報提供者ではなく独自の見識を有する郷土研究者であったといえることができる。

なお、今西の高市郡郷土誌関連の著作としては、奈良県高市郡役所編『奈良県高市郡志料』があるが、著者が複数にわたり今西の担当箇所が明確でないことから本章では考察対象から外した。

V. 喜田の大名領地沿革調査への協力と晩年

(1) 大名領地沿革調査の助手として

喜田は大正 11 (1922) 年 7 月 20 日の「学窓日記」において、今西を自身の大名領地沿革調査の助手に招いた経緯について次のように回顧している。

去る大正 7 年ゆえあつて職を退いておられたので、あたかも自分が大名領地調査のための助手を求めていたさいではあり、かたがた好都合のことと早速援助を依頼して、昨年まで約三カ年間、家族を纏めて京都にうつられ、自分のために材料の整理に努力せられたことであつた。(以下略)⁶⁴⁾

当時、喜田は京都帝国大学文科大学史学科で講師を務めており⁶⁵⁾、京都を主たる研究拠点としていた。ここにあるように今西は大正 7 年 3 月に晩成尋常高等小学校を辞し⁶⁶⁾、家族を伴って京都に引っ越して喜田の「常任書記」⁶⁷⁾、すなわち助手として大名領地調査に従事することとなった⁶⁸⁾。

この大名領地沿革調査とは、喜田の恩師で、東京帝大教授の坪井九馬三の斡旋により、財団法人日光東照宮三百年祭記念会から補助金交付を受けて実施された調査である。作業は坪井と喜田が二人で分担し、坪井が寛文 4 (1664) 年の史料『領知目録』に基づいて当時の大名領地の実際を担当し、喜田が徳川時代を通じて興廃した万石以上の大名領地の変動、および幕末・明治維新の頃の領地の実際を調査することとなった⁶⁹⁾。

喜田によれば「取りあえず領地図の作製と、その変動の状態を一覧表をもって表わすことに着手」し、今西とともに作業にかかった⁷⁰⁾。今西は喜田の収集資料に基づいて「各大名の沿革下調べ」を、喜田は「幕末維新のさいの領地図」の作

製を分担した。しかし調査は難航を極めたようである。関連史料が少ないという問題に加え、喜田の度々の胃腸疾患、さらには今西も「稚児ノ死亡、妻女の病疾ニ加フルニ当人ニモ多々健康上ニ故障等」⁷¹⁾があり難儀したようであるが、ともかく4年後の大正11(1922)年に「二十万分一図で八十余枚、例の犬牙錯綜した約二百八十大名の領分を色分けしたもの」を完成し、補助金交付元であった東照宮三百年祭記念会と坪井に提出した。

今西の担当は各大名の沿革に関する下調べということで、もっぱら地図化の基礎となる台帳制作に取り組んだようである。「今西文庫」には「大和国大名系図」と題する資料が残っており、「大名領地沿革調査用紙」と印字された専用原稿(第12図)に、大和国内における近世大名、郡山藩をはじめ高取藩、小泉藩、柳生藩など諸大名の沿革が記述されている⁷²⁾。大和国のものだけが残存しているのは、恐らく今西が今後の大和郷土研究のために大和国の分だけ貰い受けたか、筆写したものであろう。すでに明治30(1897)年に高市郡高取城主・植村氏の系譜⁷³⁾を筆写していた今西にとって、諸藩の家系はもともと関心を有していたテーマであった。かなり綿密に台帳を作成しており、喜田にとっては有能な助手であったと思われる。

喜田の調査結果の全貌は不明であるが、喜田は昭和7(1932)年にそのエッセンスを地理学講座『日本の歴史地理(続) 徳川大名封邑居所沿革概説』に掲載している。「大和国」の項を見ると、今西の「大和国大名系図」のままではないにせよ、概ね今西の記述に沿って記載されていることが分かる。例えば郡山藩の柳澤氏、高取藩の植村氏沿革の記述などは、今西の資料の要約に近い内容である⁷⁴⁾。

なお乾は、下調べだけでなく、大名領地に関わる地図作成も今西の手になるもので、喜田は地図を書かなかつたと指摘している⁷⁵⁾が、上で見た喜田の回顧とは食い違っている。この点について、記念会が昭和15(1940)年に発行した『研究報告第一号(自大正五年度至昭和十一年度)』を見ると、補助金支給対象である「大名所領沿革調査」の調査概要などは記載されているものの肝心の地図は見当たらない⁷⁶⁾。また喜田の著作である『日本の歴史地理』(地理学講座

第12図 「大和国大名系図」原稿の一部
(原稿の中央下に「大名領地沿革調査用紙」と記載)

出典:奈良県立図書館提供

修正版)の巻頭には「徳川幕末大名領地略図」が掲載されており、現存するほぼ唯一の関連地図であるが、この地図の制作者が喜田なのか今西なのか、注記がなく不明である⁷⁷⁾。残念ながら、管見の限りでは今西の手になる大名領地図は見当たらず、乾の指摘が事実かどうかを確かめる術はない。この点は今後の課題としたい。

ところで今西は喜田の助手を務めた3年間、本業の大名領地調査のみならず喜田の個人雑誌である『民族と歴史』の編集にも関わっている。これは大正8(1919)年1月に創刊され、同12年末に終刊して『歴史地理』と合併した雑誌であった⁷⁸⁾。今西はここに、「初瀬の頭仲間について一祭礼座の研究」などの郷土史的な論考を発表している⁷⁹⁾。この雑誌は『歴史地理』と同様、地方会員からの投稿を歓迎しており、喜田によれば「単に自分の研究発表機関たらしめるといふばかりでなく、同時にこれをもって各地の同好者と連絡を保ち、研究資料の提供を得て、これを蒐集するの機関たらしめたい」⁸⁰⁾という性格のものであった。今西も喜田からそのような要請を受けて執筆したものであろう。民族史をテーマとする雑誌の性格上、今西がここに歴史地理的な研究を発表することはなかったが、今西の研究蓄積の一端を垣間見ることが出来る興味深い研究である。

(2) 郷土研究への思い

最後に晩年の今西について若干触れておきたい。大正10(1921)年3月に大名領地沿革調査の助手年限が満了した後、奈良に帰って奈良県立図書館(現、奈良県立図書情報館)に就職した。今西はここで、多年にわたって蓄積した知識や史料を用いて、大和郷土研究の大成を目指していたようである。喜田によれば「これから好きな郷里の歴史に没頭することが出来ると喜んで」いたという⁸¹⁾。早速今西は同年冬、畏友で郷土史家の高田十郎、田村吉永を誘って「大和郷土研究会」なる会を立ち上げ、史跡の調査や研究雑誌の発行を目指した⁸²⁾。しかしこの会も今西が病に倒れたために2度ほど会合を行ったのみで「全く有耶無耶の内に有名無実の形」となってしまったという⁸³⁾。翌11年になっても今西の病は癒えず、遂に同年7月17日に亡くなった⁸⁴⁾。享年47歳であった。今西は死の間際まで「自分の思っている仕事だけ仕遂げておきたい」⁸⁵⁾と妻に語り、郷土研究への念を捨てなかったという。

高田は私家版雑誌『なら』の記事において、「大和ノ歴史地理学上ノ一大頭脳ガ、マダ十分ノ活躍ヲ示サナイデ天ニ帰シタノデアル」⁸⁶⁾と記すとともに、「一生殆ンド資料ノ収集ニバカリカカリハテテ、是カラソロソロ整理発表ト云フ所ニサシカカッテ、忽チ万事ヲナゲウツテシマッタ」⁸⁷⁾と述べて、その早すぎる死を悼んでいる。また同じく友人の田村吉永は、のちに喜田が没した際、今西と喜田との関係を思い出して次のように回顧している。

今西氏は終生不遇の地位に甘んじて世をおくつた。この不遇の今西氏と喜田先生。そこには誠に似た処がある。日本に於ける喜田先生、大和に於ける今西氏、共に官僚に与せず、而かも学問に生きたその一生、茲に奇なる因縁が

なければならぬ。(以下略)⁸⁸⁾

今西の死後、高田や田村らは今西の素志を継いだ形で大和史学会を設立した。喜田はその顧問を務め、機関誌『やまと』1巻1号に「大和史学会に望む」と題する寄稿をしている⁸⁹⁾。おそらく喜田は、本来ならば今西が企図していた「大和郷土研究会」への協力を考えていたのではないだろうか。残念ながら今西の早すぎる死が、その郷土の歴史地理研究を中絶させたといえよう。

VI. おわりに

本章では今西伊之吉が取り組んだ大和の歴史地理研究について、歴史地理学者の喜田貞吉との関係を中心に考察を行った。今西の歴史地理研究は平城京や条里遺構に始まり高市郡地方の宮都や墳墓、および大和国などの大名領地研究など多方面にわたっている。それらの研究は喜田の影響下において進められたものが多いが、逆に今西の現地調査の成果が喜田の研究の基盤になっていた可能性も高いと思われる。両者の関係はまさしく双方向のものであった。

この点について花森は、喜田らの日本歴史地理研究会と柳田民俗学とを対置し、地方との関わりにおいては共に「中央による地方の知の搾取という側面」を持っており、「中央にいる<考える人>と、地方にいる<集める人>の「画然たる分業」があったと指摘している⁹⁰⁾。喜田個人に関しても確かにそのような面が存在したことは否定できないが、一方で今西の研究者としての面を評価するなど、決して今西を「集める人」だけに矮小化していない点も注目すべきである。例えば『民族と歴史』に掲載された今西の論考に対して、「香畝生君（今西のこと一筆者注）の此の研究は、最も有益なるものとして、読者諸君と共に之を歓迎したいと思ふ⁹¹⁾」と述べており、今西の研究に対する喜田の眼差しがうかがえる。中央と地方をめぐる喜田（日本歴史地理研究会）と柳田との比較については、さらなる検討を行う必要がある。

ところで現代における歴史地理学の学問水準から見れば、ここで紹介した今西の研究の多くは必ずしも歴史地理とはみなせない。というのも、代表作である『高市郡史蹟略考』がそうであるように、多くは点的な史跡考証にとどまって面的、地域的な広がりをもった研究となっていないからである。事実、今西は現在では歴史地理学者ではなく郷土史家として認知されているのが実情である⁹²⁾。

しかしながら明治・大正期という歴史地理学の草創期において、今西が喜田貞吉という中央の研究者との交流の中で郷土の歴史地理研究を進めたことは注目に値する。今西に限らず、歴史地理学という「知」を媒介として中央と地方との交流が行われたことは、歴史地理学の発達史を考える上で興味深い事実といえよう。その後、今西などの郷土研究者の活動は郷土史に収斂し、現代の歴史地理学につながる動きとはならなかったが⁹³⁾、地理学史の観点からも再評価するに値すると思われる。

【注】

- 1) 喜田は明治4(1871)年に現在の徳島県小松島市に生まれ、昭和14(1939)年に69歳で没した人物で、歴史地理学をはじめ日本古代史、考古学、民族学などの分野で先駆的な役割を果たした。詳しくは①米倉二郎「喜田貞吉先生の人と学問」歴史地理学会会報100, 1978, 10-13頁, ②川合一郎「喜田貞吉の歴史地理学—未発表の講演録・講義ノートを中心に—」人文地理63-5, 2011, 42-43頁を参照。
- 2) 田代善吉「追憶」歴史地理54-6(本会創立三十周年記念号), 1929, 559-561頁。
- 3) 芳賀 登『地方史の思想』日本放送出版協会, 1972, 61-62頁。
- 4) 中川泉三没後70年記念展実行委員会編『史学は死学にあらず』, 2009, 42-43頁。
- 5) 柳田国男研究会編著『柳田国男伝』三一書房, 1988, 453-470頁。
- 6) ①児玉幸多「地方史研究の回顧と展望」地方史研究50, 1961, 3-4頁, ②前掲3) 61-62頁など。
- 7) 花森重行「歴史地理学という場の崩壊—柳田国男・高木敏雄の久米邦武批判から見えるもの」日本思想史研究会会報20, 2003, 352-361頁。
- 8) ①乾 健治『今西伊之吉伝』桜井史談会, 1971。乾はこの他にも、以下の文献において今西の生涯を紹介している。②乾 健治『大和百年の歩み 社会・人物編』大和タイムス社, 1972, 641-644頁, ③同『郷土歴史人物事典 奈良』第一法規, 1981, 143頁。
- 9) 今西の死後、畏友で奈良県師範学校教諭の高田十郎らの手で遺品の奈良関連史料写本集が整理され、目録(128種)が作成された。高田十郎「故今西伊之吉君写本目録」なら17, 1923, 2-5頁。これらは遺族によって旧奈良県立図書館に寄贈され、現在「今西文庫」として公開されている(所蔵件数は39件)。「今西文庫」については奈良県立図書情報館のウェブサイトを参照。
<http://www.library.pref.nara.jp/furusato/special001.html> (閲覧日:平成24年9月1日)。なお、この遺品写本集はすべてが単なる写本ではなく、今西自身が整理した調査メモやデータも見られることから、今西の研究史を知る上で参考となる点が少なくない。
- 10) 郷土史に関わる代表的な業績としては、幕末期の儒者であった谷三山(大和高市郡出身)について、その遺稿を整理編集して大正6(1917)年に刊行した『三山谷先生遺稿』がある。谷三山『三山谷先生遺稿』奈良県高市郡教育会, 1917, 凡例1-2頁。
- 11) 今西の伝記的記述については、特に断らない限り前掲8)①の『今西伊之吉伝』に基づく。
- 12) 乾の『今西伊之吉伝』には大福尋常小学校を卒業したとあるが、大福尋常小学校は明治14年(満6歳)の今西の入学時点では「大福小学」という名称であった。また乾は、大福尋常高等小学校も卒業したとも述べているが、大福尋常小学校に高等科が誕生したのは明治44(1911)年、今西36才の頃である。桜井市史編纂委員会編『桜井市史 下巻』, 1979, 906頁。そこで今西が学んだ高等小学校は、今西が12歳の明治20(1887)年に設立された桜井高等小学校であると推定した。
- 13) 千田 稔『地名の巨人 吉田東伍—大日本地名辞書の誕生—』角川書店, 2003, 25頁。

-
- 14) 当時の校名は、奈良教育大学創立百周年記念会百年史部編『奈良教育大学史—百年の歩み—』奈良教育大学創立百周年記念会、1990、60-62頁で確認した。なお、今西の入学年は『今西伊之吉伝』にも明確な記載はなく不明であるが、師範学校令による当時の尋常師範学校入学年齢が17歳以上であったことを考慮し、今西が満17歳であった明治25年と推定した。
- 15) 前掲8) ②515-516頁。なお、水木の在籍期間は奈良県師範学校『奈良県師範学校五十年史』、1940の「附録第十一 本校旧職員奉職年表」で確認した。
- 16) 学校名および晩成小学校への着任時期は、晩成小学校創立百年記念事業推進委員会編『晩成小学校創立百年記念誌』、1974、5頁、35頁で確認した。なお、同校は明治27(1894)年に晩成尋常高等小学校と改称している。
- 17) 今西伊之吉「大和雑記」「大和名所歌」1897年筆写、奈良県立図書情報館所蔵(今西文庫写本第22輯『漫遊録』)。なお括弧内の『漫遊録』とは、「大和雑記」「大和名所歌」などの写本が合本された写本集のタイトルである。以下の「今西文庫」の引用についても同じ注記方法とする。
- 18) 喜田貞吉「還暦記念 六十年の回顧」(同『喜田貞吉著作集14 六十年の回顧・日誌』平凡社、1982)、94-95頁。1933年初出。
- 19) 同研究会が掲げた歴史地理の「研究綱目」は、「古跡」をはじめ「地勢の変遷」、「古今の地理上の智識」、「政治地理」の4綱目であった。川合一郎「明治・大正期における雑誌『歴史地理』—同時代の研究者による評価を中心に—」歴史地理学48-4、2006、21頁。
- 20) (無署名)「日本歴史地理研究会設立趣意書」歴史地理1-1、1899。
- 21) 叻「小学校教員諸氏に歴史地理の研究をすゝむ」歴史地理1-1、1899、28-29頁。なお「叻」とは、喜田のペンネーム「叻々齋」の省略形である。
- 22) 前掲19) 23-24頁。
- 23) 若井敏明「皇国史観と郷土史研究」ヒストリア178、2002、113頁。
- 24) (無署名)「日本歴史地理研究会々員名簿」歴史地理2-3、1900、附録3頁。ちなみにこの時の会員名簿には栃木県の田代善吉、奈良県の森口奈良吉といった、のち郷土史家として大成した人々の名が見える。
- 25) 今西伊之吉「越智氏の墳墓」歴史地理2-8、1900、587-588頁。なお、この短編の末尾に『歴史地理』の編者からコメントが付けられており、15世紀後半に創建されたとする光雲寺を、14世紀の南北朝期に活躍した越智氏の菩提寺とするのは時代的に無理があるなどと指摘されている。この時点での今西の研究は、専門家にとってはまだ甘さが見られたようである。
- 26) ①早稲田大学大学史編集所『東京専門学校校則・学科配当資料』早稲田大学出版部、1978、188-189頁の折込資料参照。当時、東京専門学校の教員の名称は専任・非常勤を問わず全て「講師」であった。②佐藤能丸『異彩の学者人脈—大学文化史学試論—』芙蓉書房出版、1997、106-107頁。喜田の身分は今日という非常勤講師であった可能性もあるが、詳細は不明である。
- 27) 前掲18) 92頁。
- 28) 前掲8) ①10頁。なお、早稲田大学に夜間学部が設置されたのは昭和24(1949)年の新制大学設置時であったため、乾のいう「夜学部」は正確ではない。
- 29) 明治32(1899)年に設立された高等予科は、「文学部又英語政治科ニ入学スル者ノ予備」として位置づけられていた。前掲26) ①186頁。「中学校及ビ同等程度ノ学校」の卒業者は無試験で入学できたが、高等小学校卒業(尋常師範学校中退)の今西の場合、入学試験を受ける必要があった。
- 30) 当時の高等予科の入学試験は毎年9月か2月に実施されていた。前掲26) ①203頁。

-
- 31) 喜田貞吉「日本地理講義」1900年、徳島大学附属図書館所蔵（予備整理番号 F23）。なお、徳島大学附属図書館には喜田貞吉の筆記原稿や講義ノートなどの関連資料が計 830 件保管されている。詳しくは前掲 1) ②43-44 頁を参照。
- 32) 前掲 8) ①16 頁。
- 33) 学校名および着任時期については、川淵勝男編『椿井小学校創立百年記念誌』椿井小学校創立百年記念事業推進委員会、1972、10 頁、44 頁で確認した。なお、同校は明治 35（1902）年に椿井尋常高等小学校と改称している。
- 34) 前掲 18) 112-114 頁。両者はその前年の明治 38 年にも、法隆寺の再建・非再建に関する問題で論争を行っている。前掲 18) 105-112 頁。
- 35) 論争に関わる論文としては、明治 40（1907）年に『東京帝国大学紀要工科第三冊』として刊行された関野の「平城京及大内裏考」、明治 39（1906）年から明治 42 年に『歴史地理』誌に掲載された喜田の「平城京の四至を論ず」「平城京及大内裏考』評論」などがある。なお、両者の論争のポイントについては以下の文献を参考に整理した。田村吉永「平城京」（仲川 明・森川辰蔵編著『奈良叢記』駸々堂書店、1942）、386-387 頁、奈良県史編集委員会編『奈良県史 第四巻 条里制』名著出版、1987、19-22 頁。
- 36) 「還暦記念 六十年の回顧」のなかの「旅行年譜」によれば、喜田は明治 38（1905）年 12 月から翌 39 年 1 月にかけて平城京跡や法隆寺などを訪問している。前掲 18) 203 頁。
- 37) 喜田貞吉「今西伊之吉君逝く（学窓日誌）」（同『喜田貞吉著作集 13 学窓日誌』平凡社、1979）、304 頁。
- 38) 前掲 8) ①16 頁、29 頁。
- 39) 喜田は明治 42（1909）年に平城京・条里研究を博士論文にまとめたが、その中には大和平野の条里の地図もあった。前掲 18) 121 頁。しかし地図作製に対する今西の助力の有無に関しては、喜田の言及がないため不明といわざるを得ない。
- 40) 前掲 9) 2-4 頁。
- 41) 今西の没後、畏友高田の手で遺品写本目録が作成されたことは前述の通りであるが、今日、目録中の資料がすべて「今西文庫」として残っているわけではなく、少なからず欠落している。ここで言及した「大和条里の研究 二冊（稿本）」「奈良小字全図一析 縦五尺余、幅七尺」も遺失して現存していない。
- 42) 今西伊之吉「大和平野條里図」作成年不明、奈良県立図書館所蔵。地図には京北班田図をはじめ西大寺所伝京城坪割図、東大寺図（東大寺山界四至図）、若槻庄土帳、熊凝精舎班田図（額安寺伽藍並条里図）などの関連史料名が記入されている。地図全体の大きさは縦 145cm×横 101cm である。
- 43) 梅原末治「奈良歴史地理大講演会」歴史地理 22-3、1913、301-318 頁。
- 44) 前掲 18) 121-158 頁。
- 45) 今西伊之吉「喜田貞吉宛書簡」1911 年、徳島大学附属図書館所蔵（予備整理番号 1）。
- 46) 高市郡斯民会編『高市郡史蹟略考』、1912。この書は全 129 頁の小冊子で、非売品であった。
- 47) 前掲 6) ①4 頁。
- 48) 前掲 8) ①15 頁。
- 49) 前掲 46) の緒言参照。
- 50) 奈良県高市郡役所編『奈良県高市郡志料』、1915、緒言 3 頁。
- 51) 島本 一「大和石器時代研究史」（同編『大和石器時代研究』大和上代文化研

- 研究会, 1934), 3 頁。
- 52) 前掲 8) ①14 頁, 29 頁。
- 53) ①喜田貞吉「上代帝都の所在に就て」歴史地理 10-1, 1907, 巻頭地図, 53-58 頁。なお, 喜田が飛鳥の宮都について触れたのはこの論考が初めてではなく, 例えば明治 36 (1903) 年発行の『新訂 本邦地理講義』において, 飛鳥を含む古代宮都の比定地一覧を掲載している。②喜田貞吉『新訂 本邦地理講義』歴史及地理講習会, 1903 (初版 1902), 244-248 頁。ただし扱いは「地方誌」の章における奈良県 (大和) 地誌の附録的な扱いであり, 宮都を主テーマとして論じたものではない。
- 54) 前掲 53) ①57 頁。
- 55) 「今西文庫」には, 明治 32 (1899) 年頃における宮址調査報告である「麦秀録」が残っている。今西が高市郡史蹟調査以前から宮址に関心を有していたことが分かる。今西伊之吉「麦秀録」, 奈良県立図書館蔵 (今西文庫写本第 4 輯『麦秀録』)。
- 56) 今西伊之吉「高市郡志」1910 年, 奈良県立図書館蔵 (今西文庫写本第 9 輯『高市郡志編纂資料 明治 43 年』)。なお, 前掲 9) の高田作成写本目録では, 単に「高市郡志編纂資料」というタイトルとなっている。
- 57) 喜田貞吉「飛鳥の京」歴史地理 20-1, 1912, 巻頭地図, 1-15 頁, 歴史地理 20-2, 1912, 105-115 頁, 歴史地理 20-3, 1912, 227-234 頁, 歴史地理 20-5, 1912, 427-445 頁。
- 58) 前掲 50) 368-369 頁。
- 59) 喜田貞吉「飛鳥の京 (下の下)」歴史地理 20-5, 1912, 433-434 頁。
- 60) 前掲 46) 46-47 頁。
- 61) 前掲 31) で見た徳島大学附属図書館蔵の原稿の中にも「喜田原稿用紙」や「喜田」と印字された原稿があることを考慮すると, 恐らく「喜田用紙」も喜田の専用原稿用紙であろう。
- 62) 喜田貞吉「飛鳥の京 (下の上)」歴史地理 20-3, 1912, 228-229 頁, 前掲 46) 39 頁。
- 63) 喜田の宮都以外の飛鳥研究としては, 石舞台古墳に関する論考などに限られる。喜田貞吉「蘇我馬子桃原墓の推定一稀有の大石槨・島の庄の石舞台の研究一 (古墳墓雑考)」歴史地理 19-4, 1912, 口絵, 377-391 頁など。
- 64) 前掲 37) 304 頁。
- 65) 喜田は明治 41 (1908) 年に京都帝国大学文科大学史学科の講師に就任し, 昭和 14 (1939) 年に亡くなるまで講師や教授を務めた。前掲 1) ②43-44 頁, 前掲 18) 161-162 頁。
- 66) 今西は明治 39 (1906) 年に椿井尋常高等小学校を退職し, 同年から再び晩成尋常高等小学校に勤務していた。前掲 16) 36 頁。
- 67) 喜田貞吉「第三回大名領地調査報告書」1920 年, 徳島大学附属図書館蔵 (予備整理番号 G45)。
- 68) 今西は家族とともに喜田の自宅近くに引っ越し, 喜田の自宅や京都帝国大学などで資料整理を行っていたようである。①前掲 8) ①26 頁。喜田は記念会からの研究奨励金などから今西の生活費を負担していたものと考えられる。後でも述べるように, 今西が喜田の個人雑誌『民族と歴史』の編集を手伝うのも, こうした事情があったからではないだろうか。なお, 喜田は 2 人目の助手を雇い入れる予定であったが, 「物価の急激な騰貴のために」給料を払う見込みが立たず断念したという。②喜田貞吉「大名領地図脱稿 (学窓日誌)」(同『喜田貞吉著作集 13 学窓日誌』平凡社, 1979), 246 頁。

-
- 69) 前掲 68) ②244 頁。
- 70) 前掲 18) 173 頁。
- 71) 前掲 67)。
- 72) 今西伊之吉「大和国大名系図」1921 年、奈良県図書情報館所蔵（今西文庫写本第 10 輯『大和国大名系図』）。原稿の最後には「大正 10 年 2 月 10 日 於洛東神楽丘麓今西伊之吉編」とある。
- 73) 今西伊之吉「植村御系譜」1897 年、奈良県立図書情報館所蔵（今西文庫写本第 22 輯『漫遊録』）。
- 74) 喜田貞吉『日本の歴史地理（続） 徳川大名封邑居所沿革概説』（地理学講座），地人書館，1932，136-137 頁。
- 75) 前掲 8) ①29 頁。
- 76) 財団法人東照宮三百年祭記念会『研究報告 第一号（自大正五年度至昭和十一年度）』，1940，17-21 頁。
- 77) 喜田貞吉『日本の歴史地理』（地理学講座修正版），地人書館，1937，巻頭地図。
- 78) 『民族と歴史』は大正 12（1923）年 1 月に『社会史研究』と改称したが、これも同年 12 月をもって終刊し、『歴史地理』と合併した。前掲 18) 162-163 頁。
- 79) ①今西伊之吉「初瀬の頭仲間について一祭礼座の研究一（上）」民族と歴史 3-4，1920，513-519 頁，②同「初瀬の頭仲間について一祭礼座の研究一（下）」民族と歴史 3-5，1920，572-580 頁，③香畝生「夙の者雪冤運動 岡本黄中の「振濯録」一「土部源流考」に就て一」民族と歴史 4-2，1920，78-96 頁。「香畝生」は今西のペンネームである。
- 80) 前掲 18) 165 頁。
- 81) 前掲 37) 305 頁。
- 82) 田村吉永「雑誌『やまと』が出るまで」やまと 1-2，1923，35 頁。
- 83) 前掲 82) 35 頁。
- 84) 喜田は 9 月 17 日に執り行われた今西の葬儀に参列している。喜田貞吉「今西伊之吉君の葬儀（学窓日誌）」民族と歴史 8-5，1922，629 頁。なお、今西の死因となった病名は『今西伊之吉伝』や喜田の「学窓日誌」などにも記載がなく、不明である。
- 85) 前掲 8) ①34 頁。
- 86) 高田十郎「日誌 大正十一年五月二十四日ヨリ八月十三日マデ」なら 16，1922，7 頁。
- 87) 前掲 9) 5 頁。
- 88) 田村吉永「喜田先生と私」大和志 6-8（喜田博士追悼号），1939，316 頁。
- 89) 喜田貞吉「大和史学会に望む」やまと 1-1，1923，3-5 頁。
- 90) 前掲 7) 358 頁。
- 91) 前掲 79) ③79-80 頁の喜田による編者コメントを参照。
- 92) 乾は『大和百年の歩み 社会・人物編』で今西を「大和歴史の重鎮」として位置づけている。前掲 8) ②641-644 頁。また吉井は、「奈良県生まれの郷土史家のうち最初に活躍したのが今西伊之吉」と述べ、奈良郷土史研究の先駆者と位置づけている。吉井敏幸「水木要太郎と大和郷土史研究」（『文人世界の光芒と古都奈良一大和の生き字引・水木要太郎一』思文閣出版，2009），55 頁。
- 93) 前掲 19) 38 頁。